酔いどれ船の青春

川村湊

この物語の根拠は、京城という都市の、その場末近い酒場で飲み、酔っているという"酔いどれた"アル中の妄想にしか根ざしていないように感じられるのだ。享吉の慮天心への愛――それはまさしく子どもじみた空想的な片恋、片想いにほかならず、そしてまた田中英光が『酔いどれ船』の中で描いた「朝鮮」への思い入れとぴったり重なっているのである……

◉もう一つの戦中・戦後

講談社

「酔いどれ船」の青春

◉もう一つの戦中・戦後

川村湊

講談社

川村　湊（かわむら　みなと）

評論家。

1951年北海道生まれ。法政大学法学部卒業。

「異様なるものをめぐって」で第23回群像新人文学賞評論部門優秀作受賞。

韓国釜山市の東亜大学校で4年間，日本語・日本文学を講ずる。

著書　『異様の領域』『批評という物語』（国文社）

編共著書　『韓国という鏡』（東洋書院）『不断革命の時代』（河出書房新社）

〈酔いどれ船〉の青春
——もう一つの戦中・戦後

一九八六年十二月十日　第一刷発行

著　者　川村　湊
発行者　野間惟道
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一／郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五—一一一一（大代表）
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
定　価　一二〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。
© Minato Kawamura 1986 Printed in Japan

ISBN 4-06-203079-9(0)（文1）

目次

〈酔いどれ船〉の青春——もう一つの戦中・戦後　5
東京で死んだ男——モダニスト李箱（イサン）の詩　147
人物註　187
あとがき　202

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

〈酔いどれ船〉の青春——もう一つの戦中・戦後

装幀　スタジオ・ギヴ

〈酔いどれ船〉の青春——もう一つの戦中・戦後

第一章　京城・一九四二年冬

1

〈酔いどれ船〉――酔っぱらいたちが騒がしく乗りこみ、喧騒をあたりにふりまいたまま河から海へとくだるお祭り騒ぎの船旅。または、船長から水夫たちまでが酒に酔いしれ、舵輪も羅針儀もめちゃくちゃに狂い、壊れて、迷走するどんちゃん騒ぎの酩酊船。あるいは、嵐の波浪に翻弄され、乗組員たちは恐怖と疲労と困憊とでそこかしこで吐きちらし、船足だけが風と波の中で軽やかに舞い踊っているような難破寸前の遠洋航海船……。

甲板を波が洗い流し、帆柱が軋み、水浸しの船室では厨房道具や樽が浮かんでいる……潮水を含んでインクの滲んだ航海日誌、もぬけのからの鳥籠とラベルのはがれた酒瓶、太いロープに繋がれた浮き輪……そんな漂流物を従えながら、水平線上に浮き沈みしつつ漂う半没した漂流船……。

一九四〇年代初期、日本帝国主義政権の支配する〝植民地〟朝鮮の状況をこうしたイメージで描き出した一篇の小説がある——。田中英光作『酔いどれ船』。雑誌「綜合文化」一九四八年（昭和二十三年）十一月号に第一章を発表、その後それに二、三章を書き下ろしでつけ加えたものが、著者の死の翌月である一九四九年十二月に小山書店から単行本として刊行され、のちに芳賀書店版田中英光全集第二巻（一九六五年五月）に収録された、原稿用紙にして約四百枚の長篇小説である。

田中英光のほかの作品もそうなのだが、この小説にも作品自体がどこか浮かれ、はしゃぎまわり、そしてそのことに作者自身がいじらしくも傷ついているといった趣きがある。彼の他の小説の題名を借りていうならば、〝天使〟と〝悪魔〟、〝聖なるもの〟と〝ヤクザ〟といった、本来なら対立すべきものとしての昂揚した精神の純潔さと地べたを匍いずりまわるような卑小さとが、同一人物の中に共存している奇妙な心象風景がそこにあるのだ。これを田中英光特有のものといえば単なる一個の作家論、アドルム中毒で精神に異常をきたし、文学上の師である太宰治の墓前で自殺するという奇矯な劇を演じた〝無頼派〟文学者のパトグラフィー的な研究の対象作品ということで終ってしまうだろう。だが、私の興味はいまそこにはない。田中英光が浮かれ、はしゃぎ、騒ぎまくり、そして傷ついた現実の舞台そのものが、そのような彼とそ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

のまま共振する〈酔いどれ船〉だったのであり、そこに魂の純潔さも卑小さも、汚穢に満ちた堕落も高貴な抵抗と自恃も、そしてそのどちらに転じるともしれぬ陰謀と術数と隠匿された叛逆とがあったのである。

一九四〇年代前半の朝鮮半島、そしてその中心地としての〝京城〟(現在は大韓民国の首都ソウル特別市)。当時のこの街の光景を日本帰りの若い朝鮮人の新聞記者という主人公の目を通じて、金達寿(キムダルス)(註1)はこう描いている。

街は雑沓のなかにいた。およそそれはまた、周囲のその風光とはちがった光景であった。白省五が吐きすてるようにいったように、「乞食の街」であるかも知れない。ところどころもう崩れかかった瓦屋根や、まだある藁屋根をもまじえた屋根廂が道路の両側に低くたれさがり、その人通りのない道路上にも、鐘路などの露店へ加わってでることのできない老婆が、餅きれをいれたハムジ(行商の女などが頭にのせて歩く縁のそった四角い箱)をおいてその横にぼんやりと坐っていた。そしてそのまわりには必ず二、三の乞食がうろうろしていて、敬泰がさしかかると、よろよろと立ってきて手をだした。なかには老婆のおいてあるハムジをさししめしながら、手まねをまじえて空腹をうったえるものもいる。

(『玄海灘』)

植民地的搾取にあえぐ街、故郷の土地から追いたてられ、都市の零細民として日々の食にも事欠く人びと――やや図式的ながらも基本的にはこのとおりの現実であっただろう植民地社会の深部に、どんな抵抗精神や叛逆心、あるいは裏切りや精神的頽廃があったかは、むろん〝京城〟という街の世相の表面を垣間見ただけの〝日本帰り〟の若者に容易にわかるはずはなかった。「太平洋戦争下の朝鮮文学」(「文学」一九六一年八月号初出、田中英光全集第二巻付録資料)という文章の中で、やはり金達寿はこんなことを書いている。

> 司諫町の下宿でくすぶっていた私たちには、ここに語られているようなこと(『酔いどれ船』の中で作中人物の口から植民統治の〝地下〟で独立運動が行われていることが語られていること――後出)は皆目、何もわからなかったといっていい。わからず、ただやりきれなく、暗いばかりであった。朝鮮人どうし、互に軽蔑し合っていてほとんど口もきかず、私と金鐘漢(後出)とが何かと話し合うようになってから、やっと彼らもときに仲間入りをすることもあったが、みなはそれぞれうっ屈したものを抱えながら、それを誰にも語りえないでいた。

敗色濃い戦いの中でますます狂躁的に、暴力的になってゆく植民地の圧制権力――その軛の

下で「うっ屈」し、「語りえない」ままで過ごしていた日々の本当の〝心情〟を、では祖国解放（韓国語では〝解放（ヘバン）〟〝光復（クワンボク）〟という）を迎えた一九四五年以降に彼ら、朝鮮人文学者は十全に語りえただろうか。

現在、韓国で出版されているどんな韓国近代文学史の本を開いても、「日帝暗黒期」と見出しのついた一章があり、そこにはごく簡単に朝鮮半島を侵略（進出！）した〝日本帝国主義〟が朝鮮語による民族系の新聞・雑誌をつぶしてマスコミから民族の言語を奪い、そこに息を詰めねばならぬような〝暗黒〟の時代が展開されたことが書かれているだけである。つまり、そこには特記すべき作品も作家も文学運動もありえなかったというわけだ。

わずか一ページか二ページ、極端な場合には半ページにも満たないこの間の文学史上の記述の欠落は、そのままこの民族の歴史における最大の汚点に対する韓国人（朝鮮人）たちの精神的姿勢をあらわしているだろう。すなわち、それはできれば歴史から、記録から、記憶からも抹消してしまいたい屈辱の一時期なのであり、暗黒期として再び陽の目をみないように、自分たちの目の前にあらわれてこないように〝暗闇〟の向こうへほうり捨ててしまいたいという願望が強く感じられるのである。ここで例外的に詳しい記述がなされているとすれば、それはその暗黒期における民族的文学者たちによる抵抗文学の顕彰ということになる。福岡の刑務所で死亡した夭折詩人・尹東柱（ユンドンジュ）（註2）。北京の牢獄で獄死した抵抗詩人・李陸史（イユクサ）（註3）……。

しかし、日本（内地）、中国（外地）という植民地の「辺境」であった分だけ、彼らの活動

にはまだ抵抗の余地があったのだといえるかもしれない。実際的にそうした抵抗の〝芽〟さえ摘みとられたこの時期の植民地の中心〝京城〟においてあげられるべき名前は、こうした光り輝く抵抗精神、民族魂の持ち主たちであるよりは、日帝の走狗となり、のちに「親日文学者」として弾劾された一群の文学者たちの汚辱に塗れた名前のほうであるだろう。

朝鮮近代文学の〝父〟と呼ばれながら、香山光郎と創氏改名し、民族改造をとなえ、最大の〈民族の裏切り者〉となった李光洙(註4)。日本語の文学誌「国民文学」を主宰し〈内鮮一体〉の国民文学を鼓吹した文芸評論家の崔載瑞(註5)(創氏名石田耕造)。〝国語〟(日本語)による小説作品を率先して書き、〝聖地巡行〟(日本の宮城、神社などを巡礼すること)の紀行を綴り、積極的に文学者の〝聖戦遂行〟への協力を実践した李石薫(註6)(創氏名牧洋)。小林多喜二や宮本顕治の盟友でもあったプロレタリア詩人で、転向後「大東亜戦争」を讃美した〝愛国詩〟を書き綴った金龍済(註7)(金村龍済)……。

だが、彼らが一九三〇年代末から四〇年代前半にかけて何を語り何を書いたか、そしてその言葉の底にどんな思いが込められていたかを今の時点で追いもとめることは難しい。それは単純に資料が少ない(意図的な、あるいは解放、動乱といった混乱による不可抗力的な原因によって〝日帝末期〟の文献は散逸、湮滅したものが多い)ということにもよるのだが、また、それがいずれの側(日本側と朝鮮側、北側と南側、「親日派」側と「抵抗派」側)にとっても触

れれば血の吹き出てきそうな傷痕であって、容易に触れることを許さない禁忌として今なおあるように思えるからだ。

「暗黒期」「空白期」として、あたかも文学史の落丁であるかのように無視されている日帝植民地時代の末期。韓国の長老的な文芸評論家・白鉄(ペクチョル)(註8)によって「一九四一年から四五年までの約五年間は、朝鮮文学史上にあって羞恥に満ちた暗黒期であり、文学史としては白紙とみなすべきブランクの時代」(『朝鮮新文学思潮史』)であるとまでいわれた〝五年間〟。(なお、この白鉄もいわゆる〝親日派文学者〟のひとりに数えあげられている。創氏名白矢哲世)。

それはまた個々の文学者の年譜の中でも欠落した一時期である。日本語による著書、著作が彼らの作品年譜に載っていることは普通ではありえない。それは烙印つきの作品で、社会の側からも個人の側からも闇から闇へと葬られることを望まれる〝鬼子〟なのだ。そして、それはまた読むことのきわめて難しい作品群でもある。作品の表面にあらわれる〈内鮮一体〉〈国民文学〉〈皇国〉〈日本精神〉〈民族改造〉〈五族融和〉といった語彙をたどり、それをイデオロギー的に非難し、悪罵することはたやすい。しかし、その内側に、肉の奥に深く突きささった刺のような痛みを感じることや、あまりにも複雑に折れ曲がり、屈折しすぎたため、単純な阿諛や阿世の言葉として出て来てしまった精神の回路をたどったりすることは困難だ。そこでは細心な鑑賞眼と批評の能力が要求され、時代と社会とへの注意深い洞察とが必要されるだろう。それらの細心さを持たずに、これらの作品群を読み、批評することは無謀であり、文学的にも

無意味なことだろう。だが、それはまたもっとも手近なところからまず始めてみなければ、しかたのないことでもあるのだ。（たとえば、こうした数少ない試みで成功した例として竹内実「〈内鮮一体〉の文学」（『文学』一九七〇年十一月号）を挙げうるだろう）。

朝鮮と日本との関わり、朝鮮人と日本人との〝交通〟はこの時期においてもっとも白熱した、抜き差しがたいものとなっていた。朝鮮人が日本人を見るときの視角も、日本人が朝鮮人を考えるときの観点も、基本的にはこの時期に枠づけられたものにほかならないのであり、良かれ悪しかれ、そこには互いに裸眼で見つめあった相手の姿があったのだ。

一方には民族の存立をかけて抵抗し、民族語を守ろうとする人びとがいて、もう一方には強権的植民地支配に屈服、同化する人びとがいる。そしてその中間に擬装的同化、面従腹背、狐疑逡巡、精神破壊に至るまでのさまざまな次元、立場の相違があったのだ。これらの朝鮮人文学者たちに加えて、在朝鮮半島の日本人作家、詩人、文学的政治屋、植民地の御用ジャーナリスト、文化的ゴロツキ、軍人、スパイなどが絡みあって、この〈酔いどれ船〉は、〝暗黒時代〟の波高い海へと出帆するのである。あてもなく、希望もなく、ほとんど光もない暗闇の夜の海へと――。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook